interview

あの人が他言語を学ぶ理由

「言葉」のカギで開く扉、その向こうにあるもの

他者や異なる文化を知る、キャリアを広げる、選択肢を得る、自分に気づく…。他言語を習得することで世界につながる「扉」を開けた人たちは、扉の向こうにどのような景色を見たのでしょうか。異なる動機から他言語を学んだ6名のストーリーをお届けします。

″あなた″をほんの少し知りたい。その言葉を待っている人がいた

「あと一歩」が聞けないもどかしさが学びを後押し

もし私の仕事を「接客してコーヒーをお出しすること」だと考えるなら、わざわざ英語を学ぼうとは思わなかったかもしれません。スペシャルティコーヒーを提供するこのお店で働き始めたのは、2年前のこと。秋葉原に近い土地柄、お店には海外からのお客様がたくさんいらっしゃいます。もともと英語は苦手でしたが、メニューを指差しながら最低限のやりとりをする程度なら私にもできました。

ところが、次第にジレンマを感じるようになりました。私たちのお店では、孤独を感じやすい社会のなかで、接客する側・される側のドライな関係を超えて、まるで友達のようなつながりをお客様と築くことを目指しています。でも、あと一歩コミュニケーションを深めたいところで、いつも言葉の壁が立ちはだかる。もし相手が友達なら「昨日はどこか観光に行った?」などと自然に聞くだろうに、その一言が出ない。たとえ聞けても、相手から返ってくる言葉が聞き取れないから、そのあとの会話が続きません。

お客様と友達になることを目指すのなら、「ちょっとした友達同士の会話」ができるくらいには英語を話せるようになりたい。そんな気持ちが芽生えたものの、初めのころは英語学習の本を買うだけで満足し、身につかない日々が続きました。そこで「明日からお店で使えるような、日常的な話し方や表現を学ぼう」と考え、英語圏のユーチューバーの雑談動画を見たり、「めっちゃ〜だね」「マジで?」など日常会話でよく出てくるような言い回しを学んだりすることに。覚えた表現をお店で使ってみて「これは伝わらないんだ」と学ぶことも。とにかく実践を

取材・文／塚田智恵美（14〜15、19〜20ページ）、藤崎雅子（16〜18、21ページ）
撮影／吉永智彦（14〜15、18ページ）、姉川友香（16ページ）、山内城司（19ページ）、田崎真亜人（21ページ）

KIELO COFFEEを訪れたお客様と。何気ない会話を楽しみに何度も訪れて、親しくなる方が多いという。会話からそれぞれに異なるバックボーンを知ると「“海外からのお客様”とは一括りにできない」と鈴木さん（写真は本人提供）。

バリスタ
鈴木美樹さん
KIELO COFFEE 店長

専門学校でバリスタの技術を学び、卒業後はコーヒーの輸入・販売を行う会社に就職。2021年、「孤独の解消」をビジョンに掲げるKIELO COFFEE（秋葉原）に転職し、店長に。

#学びのキッカケ

海外のお客様との会話を深められないことにジレンマを感じた。

#変化・気づき

「今日は何してた?」あなたを知りたい気持ちが伝わり、友達に。

#楽しさ・喜び

少し気になったことを聞いてみると、その人の素顔が見える瞬間。

重ねました。

学習本の外には英語の「正解」がたくさんある

せっかくの出会いをただ流すのではなく、2言、3言の会話のなかからでも〝あなたという人間〟を少し知ってみたい。そんな気持ちが、私の根っこにあったのかもしれません。英語という言葉を得ることで、海外の方とも一歩踏み込んだ会話ができるようになりました。無難に接客をするだけなら必要のない、ちょっとした相手への興味――例えば漢字Tシャツを着ている方がいたら「なんでその漢字を選んだんだろう?」、日本のアニメのグッズを持っている方がいたら「この人、アニメが好きなのかな?」といったことを、聞けるようになった。すると、ちょっとした会話のラリーから、その人の素顔が見えるような瞬間があるのです。

そしてわかったのは、日本人と話したくて仕方がないとうずうずしている外国人がとても多いこと。シャイな人も多い日本人から街中で話しかけられることはほとんどなく、ホテルや観光地でも事務的な会話にとどまることが多いのでしょう。だから、私が拙い英語で「今日は何してたの?」と〝あなたについて〟問いかけるだけで、待ってましたと言わんばかりの勢いで、お話をしてくれる方がたくさんいました。

お店のクチコミに、海外の方が「ここには英語で話せるミキがいるよ」と書いてくれたこともありました。私のような拙い英語で「話せる」と言っていいのかしら、と照れましたが、たとえ片言でも「話そう」とする姿勢が伝わったのかもしれません。

気づいたら英語での会話が少しずつ続くようになって、日本に滞在している間は毎日お店におしゃべりしに来てくれる方や、一緒にご飯を食べに行くほど仲良くなった方もいました。一歩深く関わろうと試行錯誤しているうちに、本当に「友達」になれたのです。

だいぶ英語を話せるようになってから、英語学習の本を改めて開いたとき、「注文するときの正しい英語はどれでしょう?」という問題を見つけました。選択肢を見て「あれ?」と思った。私は海外の方から毎日英語で注文を受けているのに、その問題の正解がわからなかったのです。むしろ、そこに書かれている選択肢はどれも、実際に使う表現とは微妙に異なるように見えました。考えてみれば、人によって、よく使う言葉や省略する言葉、訛りや言い方は異なるもの。人も、言葉も、それぞれ違って、生きている。学習本はあくまでも基礎であって、その外には人の数だけ英語の「正解」がたくさんある。そう思うと私は一層、さまざまな人と出会い、友達になることが面白く感じられるのです。